

所属	心理学研究科 臨床心理学専攻 修士課程	修了年度	平成 27 年度
氏名	岩崎 香穂里	指導教員 (主査)	沢崎 達夫

論文題目	<b>青年期の本来感および随伴性自尊感情と 対人関係、心理的 well-being との関連</b>
------	--

本文概要	
<p><b>【問題・目的】</b> 自尊感情を随伴性自尊感情と本当の自尊感情とに区別する見方がある。本研究では本当の自尊感情と極めて近いものとされ、自分自身に感じる自分の中核的な本当らしさの程度を指す本来感を取り上げる。近藤（2010）は同じく自尊感情を二つに区別した上で、自尊感情を4つのタイプに分けている。自尊感情の各群の特徴を捉えることができれば、各群の者に適する対応や介入方法の提供に繋がると考えられる。本研究では、自尊感情を本来感および随伴性自尊感情の高低により4つの群に分け、各群の特徴を明らかにするために群ごとの他者配慮および友人関係について測定すること、そして自尊感情が他者配慮および友人関係を介して心理的 well-being へ及ぼす影響を検討することを目的とする。</p> <p><b>【研究方法】</b> 大学生を対象に、質問紙調査を授業前後に集団実施。また縁故法を用い、関東圏の大学生に協力を依頼した。使用尺度は、本来感尺度（伊藤・小玉，2006）、自己価値の随伴性尺度（伊藤・小玉，2006）、友人関係尺度（小塩，1998）、社会的かしこさ尺度（久光・岩淵，2009）「他者・周囲への配慮」、心理的 well-being 尺度（西田，2000）。口頭および書面にて研究概要と倫理事項を説明し、同意を得られた者に対してのみ回答を求めた。</p> <p><b>【結果・考察】</b> 分析対象者は367名（男性147名，女性211名）。因子分析・信頼性分析を行い、HH群（本来感H随伴性H）、HL群（本来感H随伴性L）、LH群（本来感L随伴性H）、LL群（本来感L随伴性L）に群分けを行った。各下位尺度を従属変数、自尊感情の4群を独立変数とした一元配置分散分析の結果、友人関係“気遣い”因子を除くすべての変数で群間に1%水準で有意な差が認められ、各下位尺度を従属変数、本来感と随伴性自尊感情を独立変数とした2要因分散分析では、ほとんどの変数で本来感の主効果が有意であった。心理的 well-being “人格的成長”因子において交互作用がみられ、単純主効果の検定では、随伴性自尊感情が高い群(HH群，LH群)・低い群(HL群，LL群)において本来感の単純主効果が有意であり、本来感が低い群(LH群，LL群)において随伴性自尊感情の単純主効果が有意であった。結果から、HH群は心理的 well-being が高く他者配慮も十分に行え、友人に合わせて行動することや相手を笑わせようとする事は少ないこと、HL群も心理的 well-being は高く、特に他者の意見に左右されずに行動できること、LH群は心理的 well-being が低く他人の意見に自分の意思を惑わされやすい一方でLL群よりは成長しようとする気持ちが強く他者配慮も行っていること、LL群は心理的 well-being が低く特に自分を成長させようとする意識や他者配慮が最も低く、友人を笑わせることで友人から肯定的な評価を得、自身の価値を一時的にでも感じようとする傾向があることが示唆された。</p> <p>各下位尺度の影響関係を検討するために共分散構造分析によるパス解析を行った。その結果、各変数が心理的 well-being に及ぼす影響としては、本来感が直接与えている正の影響が最も強いこと、随伴性自尊感情は直接負の影響を与えているが、他者への配慮を介することで心理的 well-being に正の影響を与えるようになることが明らかとなった。また、不適応的な自尊感情であるとされてきた随伴性自尊感情であるが、本来感が低い人にとっては、他者との比較によって自分自身に価値があると思えることで他者への配慮や自分自身を成長させようとする意識が高まることに繋がっていると考えられ、随伴性自尊感情にも適応的な側面があることが示唆された。</p>	